

あるがままに自然流で暮らす
「生活の達人」

たかいち れいこ
高市 礼子さん (中山町佐礼谷)

緑豊かな佐礼谷にある静かなたたずまいの一軒家。そこに住む高市礼子さんが、ふるさと佐礼谷にUターンしたのは10年前のことです。高市さんは自身を手遊人^{てまど}と呼び、さまざまな活動をしています。「他の人とは違うのが、みの虫工芸。30年前、夫がお土産にみの虫の、みので作ったハンドバッグをプレゼントしてくれて、おもしろい、私も作ってみたいと思いました。」しかし、最初は作り方がわからず、試行錯誤。その末に独自の方法を見つけ、衝立^{ついで}、敷物、バッグ、服といった作品を作り上げてきました。「ちょっと変わっているかもしれないけど、

みの虫だけでなく、鳥の巣でも蜂の巣でも、生き物が精密に作り上げてきたものを見つけると、つい集めてしまふんです。」自然のものを生かすのが高市流。「戦中、戦後と物を大切にするように教えられて育っていますから、何でも、もったいないがスタートです。捨てるよりもまず、何かに活用できないかと考えていくと、バッグとひらめきますね。」自宅や離れの工房には、みの虫工芸の他にも、藍染め、刺し子、絵手紙など数多くの作品が飾られています。昨年の12月には、かつての佐礼谷中学校の同期生と共に古希展を開催し、作品を出品しました。

こうした活動により、高市さんは昨年、内閣府が募集した自分印の生き方を実践している『生活の達人』に認定されました。「達人の認定は受けましたけど、今は達人をめざしている途中です。これからも、肩肘張らず、自然のままあるものを受け入れ、その中で楽しみを見つけていきたいです。」次にしたいことは、という問いかけには、「メンバーを集めて、何か有効な時間の使い方をしようと思案中です。時間を活かすという意味で、名前は、『時活塾』にしようかしら。」とのこと。高市さんの好奇心は、まだまだ尽きません。



▲みの虫工芸の衝立とバッグ、刺し子の服など作品は数多い。

活動的な高市さんの原動力は、好奇心が人一倍強いこと。「興味をもったことは何でもやってみようという性格です。そして、人と出会うことが大好き。出会った人には、それぞれに自分ない良いものがあるから、教えらるることも多いですね。」佐礼谷に帰ってきてすぐ、みの虫工芸の展示会を開いたことがきっかけで、佐礼谷の小学生や中学校の生徒とも交流をもつようになりました。特に中山高校では、家庭クラブの良きアドバイザーです。「私の育った時代は、自分がしたいことを選ばませんでした。だから、今の子どもたちにはいろいろなことを体験して、将来自分がしたいことを見つけて欲しいです。それに私が見ている経験や知恵が役立てばと思っています。」